

群 教 セ	F09 - 01
	平 16.224集

不登校生徒の教室復帰を 応援するプログラムの工夫

— 個人を理解し風土を育むチーム援助 —

特別研修員 金古 和美 (吉井町立西中学校)

《研究の概要》

本研究は、不登校生徒に対し教職員がチームを組んで援助すると共に、受け入れる風土を良くすることによって、対象生徒の教室復帰を促すものとする。その中核に「ほっとルーム」を据え、対象生徒に適応指導や学習指導を組織的・計画的に行い、学級や学年の雰囲気良くするためのプログラムを工夫した。その結果「ほっとルーム」が支援者同士・友人・家庭をつなぐことによって対象生徒の変容が促されることが見えてきた。

【キーワード：教育相談 中学校 不登校 ほっとルーム チーム援助】

主題設定の理由

本校には、平成15年度に相談室や学習指導室として利用できる「ほっとルーム」(図1)が設置され、生徒や家族との面接や補習などが行われてきた。平成16年度になり「ほっとルーム」には毎週火曜日にスクールカウンセラー(以下SCと記す)が配置された。年度当初、「ほっとルーム」を拠点にして学校生活を送っている生徒が数名いた。彼らの指導は、昨年度同様、担当学年を中心にしながら、空き時間の教師の協力を得て行われていた。

しかし、支援や指導にばらつきがあったり、同一の教科を複数の指導者が担当するために重複や系統性に欠けるという問題も起こった。加えて、養護教諭や担任、学年主任やSCがそれぞれの立場で適応指導を行ってきたが、それらが効率的に機能しているとはいえなかった。

これらのことを踏まえ、本研究では「ほっとルーム」を核にして、支援する教員やSCが対象生徒や問題点の理解を共有した上で一つのチームを編成し、対象生徒の理解を図り、学校生活に適応できる能力や学力を高めるための指導を協働作業として行っていくことにした。

また、対象生徒が在籍する学級では、数人の生徒から「対象生徒と仲良くしたいがどうしてよいかわからない。」という声が上がった。このような生徒の思いやりの気持ちや前向きな意欲を受け止め、対象生徒を迎え入れる学級や学年の雰囲気をよくしていくことによって、対象生徒の教室復帰に近づけると考え、そのためのプログラムを工夫することにした。

以上のように、不登校生徒を背景を含めて理解し、支援の質や協働意識が高まり、彼らを受け入れる学級や学年の生徒との関係が改善され相互交流が図られれば、対象生徒の周囲への適応力が増し、結果的に対象生徒の教室復帰が促されると考え、本研究主題を設定した。



図1 本校のほっとルーム

研究のねらい

不登校生徒を理解し、適応指導や学習指導を計画的に行い、彼らを受け入れる風土を整えるために、「ほっとルーム」をよりどころとして、複数の支援者がひとつのチームとなり、協力することによって、対象生徒が教室復帰に近づけることをねらいとする。

研究にかかわる基本的な考え方

1 対象生徒の理解に基づいて関わる

不登校生徒は自己肯定感が低く、自分を上手に表現できなかつたり、相手を信頼して対人関係を作ることができない場合が多い。そこで、対象生徒についても、これまでの生育歴を含め、背景から理解した上でより適切な支援をすることが大切であると考え。理解のための具体的な手段としては問題を背景から理解することや学校（学習・生活・友だち）への生徒の思いを理解することが大切である。さらに、対象生徒は、「勉強がわからないから学校や教室に行きたくない。」と口にすることがあるので、基礎学力をつけることによって自信を取り戻し、最終的には、将来に向けて自分なりの目標を持つことができるような指導を心がける。

そこで、本研究では対象生徒の理解を深め、周囲への適応能力を身につけさせることと、基礎学力を保証することを中核とした、段階的かつ継続的なプログラムを工夫し、実行することとする。

2 支援者会議を充実させる

いつの時でも、不登校生徒を抱えた学級担任は、対象生徒を学級に戻そうと様々な支援をし、時には家族や専門機関とも関わって様々な手だてを講じ、職員会議や職員間の情報交換で現状を伝える努力をしている。しかし、それらの努力は単発的であつたり、対象生徒の要求に合致していなかつたりする場合がある。ここには、不登校問題を学級担任が一人で抱え込みがちな実態があるといえる。このような現状を打破するためには、複数の支援者がそこにに関わり、多角的かつ専門的な視点で問題をとらえて指導にあたるのが有効であると考え。また、支援者の支援技術の向上につながる取組を計画的に行うことも必要だと考える。

3 生徒間の相互交流を図る

不登校生徒が学級に戻るためには対象生徒と所属クラスとの相互交流が必要だと考える。相互交流を図ることで、相互理解が促進され、お互いに適切な関わりが図られると考える。特に、不登校生徒の理解や思いがクラスにつながる関わりを大切にしたい。このことは不登校生徒の教室復帰に不可欠である。

対象生徒は、学級や学校に戻りたいという気持ちを持っている。また、対象生徒の在籍する学級の中には、彼らを受け入れようとする雰囲気生まれ、積極的に働きかけようとする生徒もいる。そこで、対象生徒を受け入れる側に対象生徒の理解を深めてもらい、教室復帰を目指す過程で、可能な働きかけをしていくことにする。具体的には、場に応じた適切な言動を心がけ、生徒間で互いに支え合おうとする意識や思いやりの心を築き、学校行事等で発揮される学級や学年の連帯感を強めること等が挙げられる。

そこで、本研究では、様々な学校生活の場面で対象生徒を受け入れる学級や学年の雰囲気をよくし、対象生徒と受け入れる側との相互交流が図れるためのプログラムを工夫し、実行することとする。

さらにこれらの取組をつなぐ中心的な役割をコーディネーターが担うことにする（図2）。

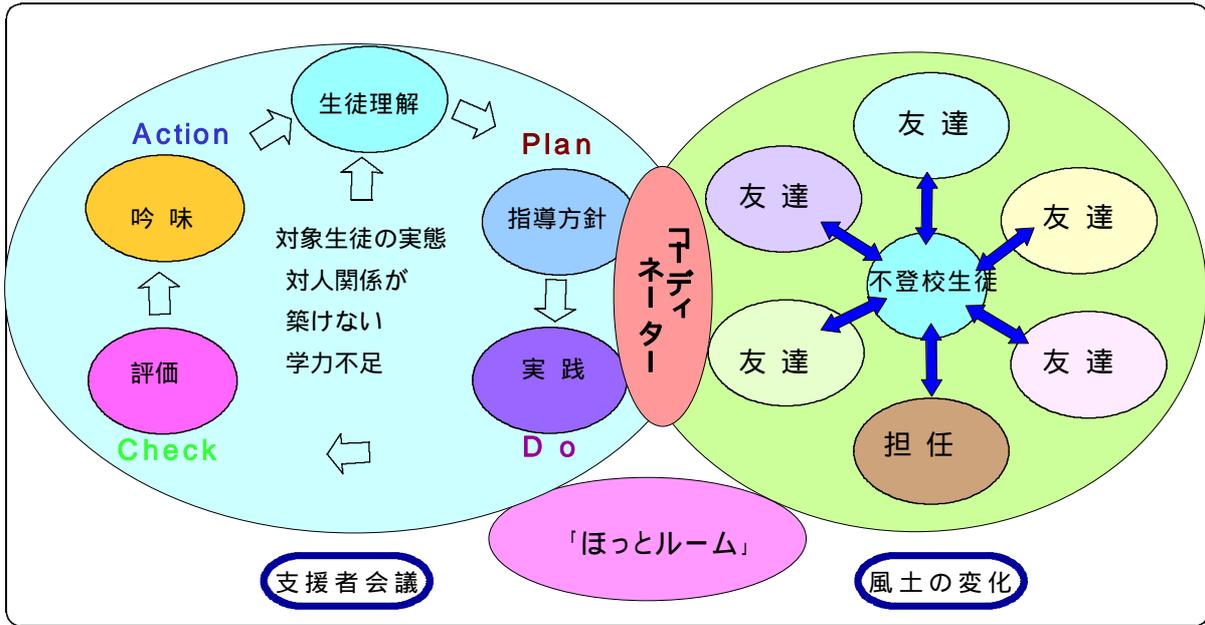


図2 支援者会議のあり方と風土の変化・それらをつなぐコーディネーター

研究の流れ

	生徒理解に基づいて関わる	「ほっとルーム」を核とした支援者会議	相互交流
4月	生徒理解のための情報交換会 SC配置 支援可能内容の確認 ほっとルームノート設置	実態把握(観察や生活ノート) 面接 学習支援・適応指導開始 個人プログラム作成	進級・学級作り 学年自治活動・学年役員会発足 学級・学年目標設定 構成的Gエンカウンター
5月			クラスに関するアンケート(一回目)実施
6月		学校評価生徒用(一回目)実施	
7月			球技大会
夏休み	自己研修 教職員研修	心理検査	ソーシャルスキルトレーニング 働く人の声を聴く会
9月	教育相談員配置	個人プログラムの見直し	ソーシャルスキルトレーニング 職場体験学習事前打ち合
10月	PTA成人教育セミナー		わせ
11月			ピアサポートトレーニング~11月 クラスに関するアンケート(二回目)実施
		研修のまとめ	職場体験 生徒会役員選挙
12月			総合的な学習発表会「萌黄祭」合唱コンクール
1月		学校評価生徒用(二回目)実施	「萌黄祭」学年活動 人権学習

実践の概要

1 【実践1】 対象生徒の理解に基づいて関わる

(1) 生徒理解

ア 面談とカウンセリング

対象生徒が、「ほっとルーム」に在室する時間に、指導に当たる支援者を固定することは難しい。そのような状況で、対象生徒が「ほっとルーム」で安心して過ごせるためには、信頼できる支援者の存在が望まれる。そこで、年度当初は、昨年からの支援の対象となっていたA男B子に昨年度から関わっている学年主任と、担任ができるだけ「ほっとルーム」に顔を出し、短い時間であっても生徒の話に耳を傾けるようにした。話を聞く中で、対象生徒の興味を知り、それをよりどころにして、自己肯定感につなげられるような取組を行うことにした。さらに、養護教諭やSCとの関わりを徐々に増やし、特にSCとはカウンセリングの時間を設定することにした。

イ 心理検査

生徒理解の一環として、必要に応じて心理テストを行い、その結果については、SCに分析をしてもらい、これらの結果をその後の指導に生かすことにした。具体的には、対象生徒の一人に9月にバウムテストを、11月にエゴグラムを行った。また、別の生徒には11月にバウムテストを行った。

(2) 適応能力の育成

ア 教室へ戻るためのステップカード

B子の生活のリズムを知ると、そこにはたくさん問題があることがわかってきた。具体的には、顔を洗ったり、髪をとかしたりという基本的な生活習慣が身に付いていないということである。初めは、その都度手を貸してやり、「ほっとルーム」で解決するようにしていたが、少しずつ、保護者に協力を要請していくことにした。このような形で適応指導を進める中で「教室へ行こう～教室へ戻るためのステップカード」を作り、B子の達成感につなげることにした。「ステップカード」はその後改編され、現在に至っている。

(3) グループ給食

A男は、給食を「ほっとルーム」で食べるので、担任が友達と食べてみてはどうかと勧めると最初は乗り気でなかったが、A男の家を訪ねたことのある生徒から始めることにすると、次第に表情がよくなり、2学期になると「今日は誰？」と聞くようになった。また、A男は、女子と一緒に給食を食べることをいやがったがB子との関わりが少しずつ持てるようになると同時に、B子が登校し、「ほっとルーム」で女友達と昼食をとることによって同じ部屋に女子の数名がいるようになって、嫌がらないようになってきている。しかし、今のところ会話らしきものはない。

(4) 学習支援（個人プログラム）

6月になってA男にも翌日の学習準備をさせることによって学習意欲を引き出してはどうかという方針が打ち出され、A男向けの時間表を作り、それに沿って学習支援を進めることになった。当初、本人はこの時間表を受け入れない様子が見られたので、時間をかけてB男の気持ちを聞いたところ、「廊下等に音が聞こえるのでCDなどを使って学習するのが嫌だ」という思いを聞くことができた。そこで再度内容を見直し、A男の意見を取り入れた時間表ができあがった。その後も学習内容や形態を見直し、現在に至っている。また、B子についても後期から時間割表を作成し学習を進めている。

2 【実践2】 支援者会議の充実を図る

(1) チーム援助の具体的な工夫

ア 「ほっとルーム」担当者および支援可能内容の確認

4月の職員会議の場で、生徒理解のための情報交換を行い、全職員に対して「ほっとルーム」登校をする生徒に対する理解を求めた。これは実質の第1回チーム援助会議である。ここで、全職員が可能な範囲で「ほっとルーム」における対象生徒との関わりを持つことが確認された。また、昨年に引き続き、空き時間を利用して「ほっとルーム」における学習指導も行うことになった。会議後、支援可能な内容が確認され、それに基づいて、担当学年が中心となり適応指導や学習指導といった計画を立てることが可能になった。

イ 「心の相談員」の配置

対象生徒の要求を見極め、よりきめ細かな指導が要求されるようになると「ほっとルーム」において常時対象生徒と関われる支援者の必要性も出てきた。この点について本校では、教育委員会等に積極的に働きかけ、2学期からは「心の相談員」を配置することができ、SC不在の4日間の午前中に在室することとなった。このことは、対象生徒の精神的な安定につながり、同時に教職員の負担を軽減し、継続的な指導を進めるための大きな推進力となった。

ウ 「ほっとルームノート」および「ほっとルーム日誌」

「ほっとルーム」には、その日の支援内容を毎時間の担当者に記入してもらったノート置き、支援の計画性や系統性を保つために役立てた。ノートの下には『今週がんばれたこと』という欄を設け、対象生徒が自分の言葉で振り返ることができるようにし、そのことによって達成感や自己肯定感につながるものと考えた。また、主にSCと心の相談員の間で情報交換が出来るよう、「ほっとルーム日誌」を作り、主に心の相談員からSCへの報告という形で活用した。

エ ほっとルーム担当者からの連絡カード

心の相談員から担任等への連絡には、カードを利用し情報を共有するとともに、チーム援助会議の際に役立てた。

(2) 支援技術向上のための研修

不登校問題は、全ての教職員にとって、最重要課題として取り組まなければならない問題である。しかし、実際には教職員一人一人の考え方には温度差がある。できる限りその温度差を縮め、同じ歩調でこの問題の解決に向けて取り組まなければ不登校問題は解決しない。そこで今年度は、校内研修やPTAセミナーにおいて、不登校問題を取り上げ、全職員および保護者の意識の向上につなげることにした。

ア 教職員を対象にした研修

8月31日(火)校内研修の一環として、SCに「生徒や保護者との関わり方」と題して教育相談上の問題解決のための教職員研修をお願いした。この日は、SCが医療機関や相談機関で関わった多くの事例や実践を交え、生徒理解につながるカウンセリング理論の一部が紹介された。不登校生徒と家族を取り巻く悪循環を様々な事例やフローチャート図から理解し、その場に関わる支援者がどの場面で悪循環を断ち切ることが有効であるのかを理解することができた。また、普段何気なくほめたり、しかったり、時にはご褒美をちらつかせたりしていることの矛盾をつかれ、その後の生徒との接し方に多大な示唆を得た。

イ PTAセミナー

10月14日(水)には本校図書室において「親子問題解決法について」と題してPTAセミナーを行った。これは、ある保護者の悩みを取り上げ、参加者全員でその解決に向かって知恵を出し合い、解決方法を探るという演習形式で行われた。保護者の多くが直面したことのある内容を取り上げたため、たくさんの意見が出され、参加した保護者が主体的に関わることのでき

た貴重な時間であった。

3 【実践3】 生徒間の相互交流を図る

本実践では、一人一人の生徒が集団生活を通して豊かな心を持ち、対人関係を良好に展開するための技術（スキル）を身につけることによって生徒間の相互交流がはかれるのではないかと考えた。具体的には、学級活動を中心に対人関係能力を築く方法として構成的グループエンカウンターを取り上げ、学校行事等でソーシャルスキルトレーニングを取り入れた。さらに、生徒自身の気づきから、仲間同士が支援し合える雰囲気を作るためのピアサポートトレーニングを行うことにした。

(1) 構成的グループエンカウンター

構成的グループエンカウンターは、集団体験学習を通して行動の変容と人間的な自己成長をねらいとしている。具体的にはエクササイズとシェアリングという二層構造になっている。エクササイズとは、指導者の考えるねらいを達成するために用意された課題のことである。生徒は指導者の用意したエクササイズを行うことによってねらいを達成していく。ねらいは次の三点に絞られる。エクササイズの中で行われる対人行動に対してポジティブな感情や自己認知が持てる。エクササイズの参加者は不安や混乱や劣等感や罪悪感を減らすことができたり、行動のヒントが得られたりする。その結果指導者と生徒の間に信頼関係が生まれる。エクササイズの中で自己開示や他者からのフィードバックを受けるため、対人関係の信頼感が増し、受容的・理解的態度が増し、自分自身の長所や短所を発見でき、ありのままの自分でよいという自己肯定感が育つ。本研究では主に、学級担任によって学級活動等の時間に行った。

(2) ソーシャル・スキル・トレーニング

ソーシャルスキルとは、対人関係を営む技術、すなわち良好に展開するためのコツである。具体的には 相手がどのような人かを理解し 自分の思いを、相手が理解できるような言葉や態度にして、適切に相手に伝える。という三点がソーシャルスキルのポイントである。このようなスキルを身につけることによって自分の思いを相手に適切に伝えることができるようになり、その結果自然なコミュニケーションが図られ良好な対人関係を築くことができる。同時に対人関係に伴うストレスを低くすることもできる。本研究では、総合的な学習「進路」領域において、具体的なストレス場面を克服するトレーニングを行った。

(3) ピア・サポートトレーニング

ピアサポートは仲間が他の仲間を支援する方法である。仲間がお互いの悩みをきちんと受け止め、解決していく力をつけることができれば不適応を起こす人が少なくなるのではないかとこの考えに基づいて開発された。初めにサポート活動の前段階として、仲間を支えるために必要なスキルをトレーニングによって養成する。その次に、集団のニーズや支援する側の体制や力量によって、またはトレーニングを受けた子どもたちの願いによって、様々なサポート活動が展開されるのである。本研究では、2学年から有志を募り、主に土曜日の午後にトレーニングを行った。そして学年主任が中心となって、生徒のニーズに合わせたピアサポート活動を展開していくこととした。

その結果、サポート活動の主たる企画を学校行事にあてて展開することになった。具体的には郷土料理を作るというねらいで行われる学年活動で、「ほっとルーム」登校の生徒にどのような関わりができるかを相談し、「ほっとルーム」でできる活動を提案し実行することになった。学年活動当日、複数の生徒が「ほっとルーム」に出入りし、A男は他の生徒と共に活動することができた。残念ながら、B子は当日欠席であったが、別の日に行われた合唱コンクールには参加できた。

研究のまとめ

1 対象生徒の変容と課題

研究期間を通して、対象生徒はどのように変容したのかをまとめる。A男は、おどおどした行動がめっきり減り、表情は豊かになり、会話も増えている。何よりも一日のうちの数時間を「ほっとルーム」で過ごすという生活のリズムができてきたことは社会的な適応力が育ちつつあることの現れであろう。また、「ほっとルーム」における過ごし方も、主体的に決められるようになり、学年当初には考えられなかったが、現在は運動などにも取り組めるようになっていく。また、「ほっとルーム」という限られた空間の中ではあるが、同室の生徒や関わりを持つ支援者との人間関係が築けるようになり、明らかに適応力が高まっていると考えられる。特に郷土料理作りに取り組んだ学年活動では、複数の生徒や支援者に囲まれてたこ焼きを作ることになった。今後、A男がより多くの生徒との関わりを持ち、教室で生活できるようにするための確かな手だてを考えていきたい。

B子については、SCとのカウンセリングを中心に課題を設定し、それを達成するというモデルステップを繰り返すという手だてで、自己肯定感を高めるようにしてきた。その結果、芸能界に入るという目標に向かって交渉能力を発揮したり、手続きを調べたりして自己実現を図ることができた。現在は、より現実的な目標を設定しそのために必要な進路について、PCを使い自主的に調べられるようになってきている。また、文や絵を描くことの好きなB子は、アイドルタレントの話や紙芝居のように作ったり、その日のできごとを思いつくまに記録したりする中で、達成感を得たり自分を客観的に見たりできるようになりつつある。一方で、母親や家族の養育態度の変容を促すための手だてとして、SCは、本人や母親とのカウンセリングを始め、B子が心の不安を訴えたことをきっかけに父親にも働きかけ、カウンセリングを継続して行っているが、計画的に継続してカウンセリングを行うことが難しい。不登校生徒を抱えた家族の問題意識を啓発することの難しさを痛感している。

2 実践を通して学んだこと

本研究では、「対象生徒の理解に基づいて関わること」「支援者会議を充実させ、支援者が協働して課題解決を図ること」「学級や学年の生徒間の相互交流を図ること」の3つの視点で実践を行ってきた。実践を通して、支援者が研修等により専門的な知識を得、支援者会議で確認されたことが実行に移され、対象生徒との関わりを重ねるうちに支援のあり方が変わったことを実感した。それは一言一言の言葉かけであったり、対象生徒の理解の仕方に現れた。また、今年度は教職員やPTA研修の場でSCの専門性を生かすことができたが、このように対象生徒に関わる支援者それぞれの持つ特性や技量が最大限に生かされたとき、支援の質が変わるといった大きな成果につながると感じた。また、チーム援助会議をすることによって教職員の協働意識は高まり、生徒理解が深まったことはいうまでもないが、さらに大きな収穫は、多くの職員が対象生徒の変容を温かく見守り、短時間であっても互いに情報交換を行える職員室の風土ができたことである。

また、学級担任の努力により、対象生徒を迎える学級の中に、より温かな雰囲気や築かれていることも大きな収穫である。当初、生徒の中からは「何故B子さんだけが特別扱いなのか」「私たちに非があるのなら、言って欲しい」等やや感情的な発言が見られたが、学級や生徒一人一人の成長を促す丁寧な指導や生徒自身の気づきによって、今では「B子さんは登校していますか」「部活に誘います」などの声が聞けるようになった。さらに、生徒にとって大きな目標であり、達成感につながる多くの学校行事では、生徒が協力して自主的に対象生徒の参加を呼びかける姿が見られた。また、学年役員会等の話し合いでは、クラスの課題という論点を取り上げたところ、役員の中から不登校や「ほっとルーム」登校の生徒の問題が課題に挙

がった。現在、その解決に向けた手だてを話し合っている。このようなことから、不登校問題は対象生徒だけの問題ではなく、そこに関わる生徒の成長にもつながっていることを実感した。

以上のことから、不登校生徒の問題解決を図るとき、不登校生徒を背景から理解し、教職員が組織として協働し、対象生徒と仲間との相互交流が図られることによって、少しずつではあるが、対象生徒の中に外に向かうエネルギーが生まれてくるように感じた。そのエネルギーが自己実現につながるのだと思う。また、教職員や生徒および家族も巻き込んだ「ほっとルーム」機能が十分発揮され、対象生徒一人一人の事例に即して対応できる柔軟な体制が確立され、対象生徒のエネルギーをうまくみ上げることが可能になれば、教室復帰に近づけることができるだろう。

つまり「ほっとルーム」が支援者同士をつなぎ友人をつなぎ家庭をつないだとき、それぞれが変わり子どもが変わることが期待できる。そのイメージを(図3)に示す。今後、プログラムの改編を重ね、不登校問題の解決および予防的機能を充実させていく必要を痛感している。

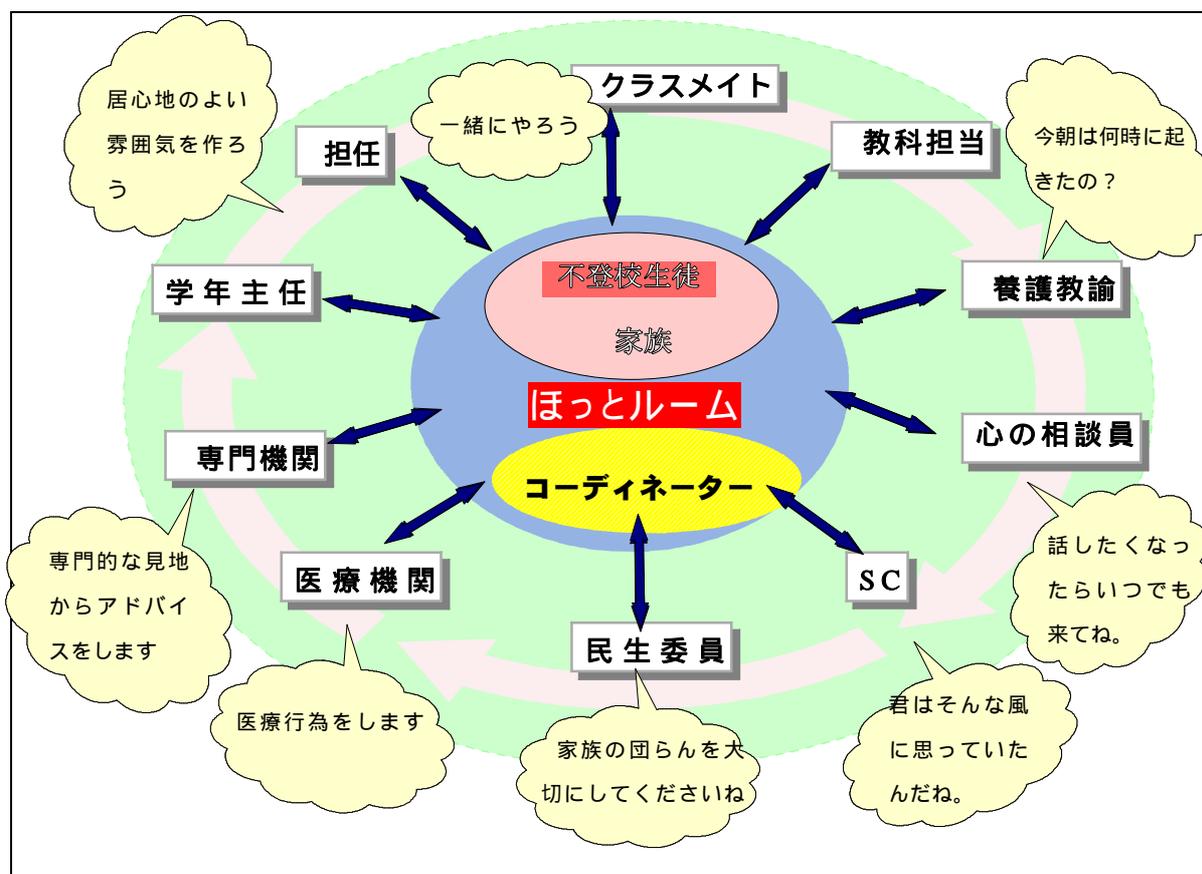


図3 人をつないで不登校問題に取り組む「ほっとルーム」のイメージ

参考文献

- ・群馬県総合教育センター 「不登校問題課題解決支援資料」 (2004)
- ・生徒指導資料 第2集 「不登校への対応と学校の取組について - 小学校・中学校編 - 」ぎょうせい (2003)
- ・中野武房・日野宜千・森川澄男編著「学校でのピアサポートのすべて」ほんの森出版(2002)
- ・森川澄男 監修 菱田 準子著 「ピアサポート指導案&シート集」ほんの森出版(2004)